The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山中商会の西洋美術工芸品輸入とその意義 : 昭和3年「美術工芸品展覧会ー欧米最新考案」を中心に
Author(s)	山本, 真紗子
Citation	デザイン理論. 2024, 84, p. 39-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97666
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山中商会の西洋美術工芸品輸入とその意義
昭和 3 年「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案」を中心に

山　本　真紗子

キーワード
山中商会，美術工芸品，西洋美術，近代日本，展覧会
Yamanaka & Co., Arts and Crafts, Western art, Modern Japan, Exhibition

はじめに
1. 山中商会の日本国内での展覧会活動
2.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の概要
3.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の規模
4.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の目的と意義
むすびに

はじめに

本論文は，美術商「山中商会」が日本国内で展開した事業，とくに東アジア（中国・朝鮮・日本）以外の国・地域の美術品を取り扱った展覧会事業を史料を用いて具体的に明らかにする。山中商会では後述するように，西洋美術，とくに工芸品の輸入や展示もおこなっていた。我が国での西洋美術作品の移入や受け入れについては，ロダンや印象派といった特定の作家や芸術運動の我が国での受容を追ったもの，松方幸次郎や大原孫三郎のようなコレクターに焦点をあてたもの，白樺派・日仏芸術社のように受容に尽力した団体・企業について取り扱ったものなど数多くの先行研究がある。そのようななかで，近代の西洋美術商の動向について記述した日本洋画商協同組合（1994）[1] や絵画作品の到来について通史的研究をおこなった宮崎（2007）[2] を主に参照しながら，山中商会の「西洋美術」に関わる活動の目的や位置づけについて検討していきたい。

本稿でとりあげる山中商会（Yamanaka & Co.）とは，大阪の茶道具商・山中箸篁堂（山中吉郎兵衛）が海外進出をかかげ設立した会社である [3]。1894（明治 27）年，のちの社長・山中定次郎（1866～1936）らが渡米，翌年のニューヨーク支店開設を皮切りに，ボストン・ロンドン・シカゴ・パリ・北京・上海などに支店や出張所を設立した。1913（大正 2）年 に開

本稿は，第 65 回意匠学会大会（2023 年 8 月 24 日，京都精華大学）での発表にもとづく。

催の清朝恭親王コレクションのオークションをきっかけに，欧米では東アジア美術を扱う古美術商として名をあげ，英国王室をはじめ多くの顧客を抱えた。海外での活動が盛んであったことから日本をとりまく国際情勢が悪化すると大きな影響を受け，1945（昭和 20）年日本の敗戦により欧米での活動は撤退した。

このようなことから，山中商会の研究は従来東アジア文物を欧米や日本に紹介・販売・展示したことに注目してきた[4]。しかし，一方で山中商会には，欧米向の洋式家具生産とその輸出[5]，ペルシア美術工芸品の日本での取り扱い[6]といった実績が存在する。また松方幸次郎のフランスでの浮世絵収集やその日本への輸送[7]に関わり，青樹社と共催で松方コレクションの売立も開催した。

そこで，本稿では，山中商会が日本をはじめとする東アジアから欧米へと美術品を紹介・移動させたことではなく，欧米から日本へともたらした美術工芸品や，それにまつわる活動に着目したい。

1．山中商会の日本国内での展覧会活動

1923（大正 12）年，社長・山中定次郎が欧州歴訪から帰国した後，山中商会は日本国内で海外の美術品を集めた展覧会（正確には展示販売会）を開催するようになった。以前より国外では東アジア美術の紹介や展示販売を目的に展覧会を開催していたが，それを国内でも実施するようになったのだ。国内の展覧会も基本的には中国・朝鮮・日本の美術工芸品が中心であったが，それらと並列に，もしくは展示の一部として中国・朝鮮・日本以外の国・地域の美術品が出品された会があった。次の（表 1）に，山中商会の国内での展覧会事業の概要を提示する。

（表 1）山中商会主催の国内での展覧会（展示販売会）
＊グレイ部分は東アジア以外の国・地域の作品の出品を確認した会。

開催年（西暦）	タイトル（開催地）	中国・朝鮮半島・日本以外の美術品の出品
大正 12（1923）	古代支那美術展観（大阪）	
大正 13（1924）	埃及希臘波斯支那古代美術展観（大阪）	コプト織物，エジプト（彫刻・布画・玉工芸），ギシリャ（彫刻，陶器），ペルシア（陶器），ローマ（大理石像）インド（仏像）など
大正 15（1926）	東西古織錦繍展観（大阪）	「埃及コプチツク織布額」「埃及アラビツク織物額」「希臘織物額」「波斯織物額」「西班牙織物額」，ギリシャ・イタリア・オランダ・スペイン・ポルトガル・ボヘミア・ロシア・シリア・小アジア等の裂，「和蘭，仏蘭西，西班牙古代家具類」

	東西古陶金石展観（大阪）	ガンダーラ彫刻，「羅馬彫刻」，「埃及希臘古藝品」（彫刻・陶器など），ペルシア工芸品など
昭和 3（1928）	美術工芸品展覧会－欧米最新考案（大阪）	＊本文内で記述するため省略＊
	支那古陶壷石展觀（大阪）	
昭和 5（1930）	世界民衆古芸術品展覧会（大阪）	「外国陶磁器」（ペルシア，オランダ，ニューメキシコ）「欧州時代家具」（イギリス，フランス，イタリア，スペイン）「海外民衆雑器」（安南，南洋，ジャワ〔面・ワーヤン〕，ペルシア）
昭和 7（1932）	東西古美術展覧会（大阪）	エジプト彫刻，ギリシャ彫刻・土器，「ルリスタン」銅器，ガンダーラ・ストゥッコ
	世界古美術展覧会（東京）	「埃及彫刻絵画」「希臘彫刻，土器，古硝子」「シジヤン銅器」「ルリスタン銅器」「波斯陶器」，油絵（ラファエル・コラン），「英吉利，仏蘭西，西班牙古代家具」（オランダ，イタリア含）「阿弗利加土俗木彫」
昭和 8（1933）	世界古代裂日本民藝品展覽會（大阪）	時代外国裂「埃及」「和蘭」「西班牙」「仏蘭西」「伊太利」「ブルガリア」「ダマスク」「カシミヤ」「波斯」「印度」「暹馬」「瓜哇」「東甫塞」「老檛」「高架索」「小亞細亞」「中央亞細亞」 「故原文次郎氏外邦裂コレクション」（ペルシア・インド・ジャワほか）「阿弗利加木彫土俗芸術」（70 点）「瓜哇古面」（50 点）
	日本支那古陶美術展覧会（東京）	
	時代屏風浮世絵琳派展覧会（東京）	
昭和 9（1934）	支那朝鮮古美術展観（東京）	
	日本支那古陶美術展覧会（東京）	
	日本古陶磁支那古美術展覽會（大阪）	
昭和 10（1935）	時代錦繍大展覧会並ニ有職に関する蒔絵物，人形（東京）	時代裂「埃及　コプチック」「阿蘭陀」「西班牙」「仏蘭西」「秘露」「亞刺比亞」「高架索」「中央亞細亞」「カシミヤ」「波斯」「印度」「ボカラ」「土耳古」「希臘」「アフガニスタン」「ブルガリヤ」「暹馬」「瓜哇」「東甫塞」「露西亜」「西蔵」「蒙古」「老檛」「馬來半島」
	支那古美術展覽會：并ニ羊毛緞通（大阪）	
	時代民藝品石灯籠展覽會：并ニ羊毛緞通（東京）	
昭和 11（1936）	時代錦繍古代人形蒔絵浮世絵展覧会（大阪）	
	時代屏風展覧会（東京）	

昭和 13（1938）	世界古美術即売大展観（大阪）	エジプト，「健陀羅」，ギリシャ（彫塑，ガラス），ポンペイ（彫刻），ジャワ（木彫彩色面，ワーヤン），アフリカ（木彫土俗人形），ペルー（土俗水注），オランダ（陶器）
昭和 14（1939）	東洋古美術展観（東京）	
	石灯篭野外展（芦屋）	
昭和 15（1940）	松方氏蒐集欧州絵画展覧会（大阪）（＊青樹社と共催・松方幸次郎蒐集品売立）	絵画，彫刻（ロダン），家具（椅子，食器棚），書籍（風景帖）
昭和 16（1941）	時代屏風百双展（大阪）	
	乾山追憶遺作展（大阪）	
昭和 18（1943）	古備前焼展（大阪）	

（表 1）でみるように，西洋美術といっても絵画や彫刻は「松方氏蒐集欧州絵画展覧会」を除きほぼ出品がなく，「裂」すなわち染織品や陶磁器・ガラス等の工芸品がそのほとんどを占めることがわかる。ギリシャ・エジプトは古代の作品，アフリカは木彫土俗人形のみと，時代やジャンルの偏りもある。染織品は，山中商会は茶道具商として古裂なども取り扱い，日本の着物や仕覆などを海外のコレクターに販売していることが背景にあると考えられる[8]。インドや暹羅等の地域は，定次郎自身が大正～昭和初期に天龍山石窟やアンコール・ワット，ボロブドゥール等の仏跡を訪れていたことから関心が高く，中国文物と並んで山中商会が注力していたジャンルといえよう。また，様々な地域の民具・生活雑器やアフリカの木彫人形が選ばれたのは，20 世紀初頭にヨーロッパを中心におこったアフリカ芸術への関心や，民藝運動との関連であろう。

山中商会と柳宗悦・民藝運動の関係は深く，柳は 1930（昭和 5）年ロンドン滞在中に山中商会同支店にて「桃型の盒子」等を購入，その後も山中の展観や出品作品について著作で言及している。柳は同年の「世界民衆古芸術品展覧会」の序文を書いているが，のちに「特に昭和五年東京と大阪とで開かれた山中商会主催の民藝展は，この勢いに油を注いだ。それ以後大百貨店も競って類似の会を催すに至り，早くも「民藝」という目新しい言葉は，誰の口にも上るに至り，辞書にさえ載るに至った。」[9] と同展を振り返っており，山中定次郎も 1936（昭和 11）年の日本民藝館開館時に祝辞を送っている[10]。また阪急百貨店美術部は民藝売場を常設し濱田庄司設計のモデルルームを設置するなど民藝の取り扱いに力を入れていたが，山中商会は 1932（昭和 7）年より同店美術部に支店を開設し，「民藝展」（1942〔昭和 17〕年 6 月 23 日～30 日）等も開催している[11]。

では「西洋美術」の展示についてはどうか。前述のように山中定次郎が 1919（大正 10）年に社長就任後最初の欧米視察に出発し，1921 年に欧州を再訪問して各国で多数の古美術品を収集し，帰国後「埃及希臘波斯支那古代美術展観」が開催された。そこから大正末から昭和初期にかけて「東西」「世界」と銘打った展覧会を開催するようになる。山中商会の意図としては，東＝（主に）中国古美術と対峙する形で「西」や「世界」の美術を紹介しようとしたようだが，先述するようにギリシャ・エジプト・ペルシア・ガンダーラ美術と幅広く見えつつも特定の時代・地域・ジャンルがピックアップされており，当時どのような地域・時代の作品が鑑賞すべき「美術」と認識されたか，関心がもたれていたかをうかがわせる内容である。

西洋画は「松方氏蒐集欧州絵画展覧会」以外では 1932（昭和 7）年「世界古美術展覧会」のラファエル・コラン（2 点）くらいしか確認することができない。1940（昭和 15）年の「松方氏蒐集欧州絵画展覧会」は青樹社との共催である。青樹社（青樹社画廊・青樹社画堂）は東京・大阪に店舗を持ち日本・海外の洋画の展覧会を数多く手掛けており，単独でも松方コレクションの展覧会を開催した（1934［昭和 9］年・1940［昭和 15］年・1941［昭和 16］年）。そのためこの会は山中商会の企画というより青樹社主導もしくは共同企画の性格が強い。また当時，西洋美術の輸入や展示をリードしていた美術商にエルマン・デルスニスがいる。フランス人であるデルスニスは黒田鵬心とともに日仏芸術社を起こし，三越百貨店や大阪朝日新聞社とも協力しながら 1922（大正 11）～1931（昭和 6）年東京・大阪で「仏蘭西現代美術展」を毎年開催した[12]。これはフランスの 19 世紀の物故作家から同時代の現代美術家，エコール・ド・パリの作家にいたる様々なジャンルを幅広く展示，彫刻はロダン美術館館長の後援を受け近代彫刻を出品，工芸品もあつかうなど大規模な展覧会であった。なお同社やデルスニスは小規模展・地方での展覧会開催や美術館等への作品寄贈も行っている。フランスの同時代美術の取り扱いではやはりフランス人のデルスニスに伍するのは難しく，山中商会は「工芸品」「古美術」に軸足を置き地域やジャンルを幅広くそろえることで独自性を出そうとしたのではないか。

このようななか，山中商会の展覧会ではやや特殊な構成の展覧会であった「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」について，次章より詳しく見ていく。

2.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の概要

山中商会主催の展覧会でほぼ唯一西洋美術主体の展覧会として開催されたのが，「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」である（以下「美術工芸品展」とする）。1928（昭和 3）年 10 月 6 日～8 日の会期で，大阪美術倶楽部（大阪淡路街 4 丁目）で開催された。同展は岡

部・金内（2021）[13] でその内容の一部がすでに紹介されているが，今回山中商会所蔵の同展カタログの調査の結果，価格の書き入れを確認した。以下，順にカタログの内容について確認していこう。

【1】山中定次郎，稲畑勝太郎（大阪商工会議所会頭），久米桂一郎（東京美術学校）・田邊孝次（東京美術学校）による序文

【2】（無署名）「欧米最新の工芸美術 ── 主として仏蘭西に就て」

【3】作品の写真とリスト：巻末に作品リストがあり，番号がつくのは 1113 点（番号無の出品物も存在），うち写真掲載は 229 点。価格は写真の傍に書き入れられたため，写真掲載の作品のみ価格が判明する。

（1）「佛国彫刻」：番号 1〜98（筆者注：79 番は作品写真と巻末リストの記載が一致しない）＝ 98 点（99 点）。カタログの前半はこのフランス彫刻の紹介で，作者の肖像写真・略歴・作品写真が付く（巻末リストに名前・作品名のみ掲載の作家もいる）。掲載作家は「エミル・ブウルデル氏（A Emile Bourdelle）[14]」，「アリスチユド・マイヨール氏（Aristide Maillol）」，「ヂヨセフ・ベルナール氏（Jossph Bernard，「Joseph」の誤りか）」などである。序文によるとこれらの作品は社長の定次郎自ら作者のもとを訪ね歩き蒐集したとのことで，掲載された作者肖像写真には「À Yamanaka」「À M. Yamanaka」から始まる作者自筆のメッセージやサインなどが書き入れられたものもある。出品作家はロダンの次の世代で，ブールデル，マイヨール，ベルナールを「仏蘭西彫刻界の三傑」として紹介し，他にもシャルル・デスピオやフランソワ・ポンポンらのほか，ロダンやマイヨールの門下（Louis Desean, Marcel Gimond など），女性作家（Genevieve Granger）なども含まれる。

（2）「英国水彩画」：番号 99〜118 ＝ 20 点。作者は「キツトソン（アール，エチ）」（3 点）「ブリスコール（アーサー）」（4 点）などで，作者履歴などの掲載はない。

（3）「佛國陶器」：番号 119〜167 ＝ 49 点。「ヂヤン・マヨドン氏（Jean Mayodon）」（5 点）のみ肖像写真・略歴がある。ほかはすべて「セレー」（44 点。肖像写真・略歴なし）の作品。

（4）「工芸品」：番号 168〜1112 ＝ 945 点。内訳はフランス（ゴールド，ドーム，セーブルなど）389 点，ドイツ（「ユーゴ―・クルグマン」，「バツシエン・ハイメル」など）52 点，デンマーク（ロイヤルコペンハーゲンのみ）20 点，イギリス（アスプレー，ダンヒルなど）232 点，アメリカ（ティファニー，カルティエなど）252 点である。なお，巻末リストに名前がないがカタログ前半に作者名付きで作品写真が掲載された作品が 123 点あり，カタログの番号と実際に出品された点数が一致してないようだ。

（5）「於米国加工品」：番号無しのため出品総数不明。山中商会米支店での取扱（加工）品。

久米の序文によれば「婦人室（ブドアール）の装飾にあてられたもの」であった。

（6）「於米へ輸出本邦製品」：番号無しのため出品総数不明。喫煙具や切手入，写真立など，「於米国加工品」に準じた雑貨類。材質は瑪瑙や七宝など。いわゆる日本の工芸品は，図版最終ページ掲載の「鐘ヶ淵紡績会社山科工場製錦織」2 点と「友禅婦人着物」1 点のみである。

さて，他にカタログからわかる作品情報は，サイズと書き入れられた価格である。

【A】作品サイズ：彫刻や一部の陶磁器作品のみ作品の高さが写真のそばに記載される。高い順に並べると，2 尺（約 61cm）以上の作品は 6 点のみ。そのほか，1 尺以上 2 尺未満が 24 点と，ほとんどが室内や卓上向と思われる小型の作品であることがわかる。

【B】作品の価格：写真が掲載されたものは 229 点，そのほとんどに値段の書き入れがある。山中商会所蔵の展覧会カタログには，本展のもの以外にも作品写真に値段の書き入れがあり，社員の商談時の控えや記録用と思われる。山中商会の経営資料は昭和の空襲等によりその多くが失われており，展覧会で実際に売れた作品や売上額についての記録は現在確認する手段がほぼないとのことである。

以下，掲載された価格についてである。最高価格はブールデル《弓引くヘラクレス》で 8,500 円，現在の価格に換算すると，約 660 万円となる[15]。これを含み 1,000 円以上は 25 点ですべて彫刻である（1,000～2000 円未満は 12 点，2,000～2,500 円は 4 点，3,000～3,500 円が 6 点，4,000～4500 円が各 1 点）。100 円以上 1,000 円未満は 101 点，100 円未満は 72 点であった。作品種別でみると次のようになる。彫刻の最高値は前述《弓引くヘラクレス》で 8,500 円，最安値は 150 円。水彩画は 4 点のみ価格が判明し，300 円 3 点と 250 円 1 点である。陶磁器（置物等も含む）は 31 点の価格が判明，最高値は番号 119：マヨドン[16]「斑點釉鹿丸絞壺」の 1,500 円，あとは 500 円（番号 125：セレー「高釉角メダリオン模様大花生」），400 円（番号 122：マヨドン「斑點釉鹿丸絞鉢」，123：マヨドン「青釉婦人鹿浮彫皿」），350 円（124：セレー「黒釉間取花紋花生」，246：仏国ミユゼーセーブル「陶器絵高麗式丸紋花模様花生」）と続く。陶磁器以外の工芸品では最高値が 850 円（番号 490：仏国エドガーブラン「鉄座屏　鹿模様」，83：作者記載無「金瑪瑙付マツチケース」），以下 500 円以上 7 点，100～500 円未満 51 点，100 円未満 58 点と続く。

以上，展覧会の作品の概要について述べた。では，これらの出品物は他の展観・展覧会と較べ，どの程度の位置にあったものであろうか。

3.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の規模

本章では，同時期の他の展覧会（展示販売会）と比較することにより，「美術工芸品展」の位置づけを検討していきたいと思う。

まずは出品数である。山中商会の展覧会カタログの巻末リストで比較すれば,「支那朝鮮古美術展観」(1934〔昭和 9〕年)は中国文物 928 点・朝鮮半島文物 262 点の計 1190 点,「時代錦繍大展覧会並ニ有職に関する蒔絵物,人形」(1935〔昭和 10〕年)は 1617 点,「時代民藝品石灯籠展覽會 : 并ニ羊毛緞通」(1935〔昭和 10〕年)は民藝品 2500 点・灯篭 100 点・緞通 350 枚など,1000 点以上出品していた会も多く,「美術工芸品展」はそれほど突出した規模であったとはいえない。

次にその経済的規模についてである。冨田昇による山中商会主催展覧会での中国文物に関する一連の研究[17]には山中商会所蔵カタログ調査から出品数・おおよその価格・売上額がまとめられている。それによれば高額商品は,「世界古美術展覧会」(1932〔昭和 7〕年)は天龍山将来品が 15 万円(現在価格で約 1 億 1655 万円),古銅器に最高価格 6 万円がついた。他に「世界古美術展覧会」(1932〔昭和 7〕年)は古銅器 6 万円,「支那朝鮮古美術展覧会」(1934〔昭和 9〕年)の最高額は古銅器 10 万円,石仏 4 万円,明赤絵 6 万円,玉器 6〜7 万円など,品種にもよるが 10 万〜数万円の値がつく。ただこのような高額商品は特別で,1 千〜数千円台やそれ以下の比較的安価なものが実際には主要な価格で,出品された商品がすべて即時に売却できたわけでもない。とはいえ,例えば「日本支那古陶美術展覧会」(1933〔昭和 8〕年)では売値総額 200 万円余り,招待 3 日で売り上げ 500 点,40 万円超。前述の「支那朝鮮古美術展覧会」では 1 割は売れないだろうが売上総額 300 万円を下らないだろう,との同時代資料が引用されており,各展の売上の総額は相応の規模であったと指摘している。以上から中国文物に比べれば「美術工芸品展」の価格は相対的に安価であったといえる。

では西洋美術品の場合ではどうか。青樹社主催の 1934(昭和 9)年 2 月 6 日〜2 月 20 日「松方氏蒐集欧州絵画展」(東京府美術館)と比較しよう。同展は絵画 111 点,版画 107 点(+番外 1 点),彫刻及家具 10 点が出品された。その「陳列品価格表」によると,価格が掲載された作品のうち最高価格がローザ《戦陣》の 15 万円,最低価格がカルポー《肖像》70 円であった。10 万円以上のものは前述のローザの作品と「セガンチニ」《羊毛刈》13 万円しかなく,この 2 点を除くと 1 万円以上 10 万円以下の作品はセザンヌ《エクセツスとマルセーユ湾》35,000 円,「プウサン」《古城趾》3 万円,「イズラエルス」《帰漁》22,000 円のほか,20,000 円が 3 点,1,500 円 1 点・1,3000 円 1 点・10,000 円 4 点があるのみである。彫刻はそれより価格が低く,作者不詳《三人の子供(大理石)》と作者不詳《女三人像(大理石)》の 3,000 円,ロダン《接吻(ブロンズ)》800 円,作者不詳・習作(大理石)100 円の 4 点である。版画はさらに安く最高価格は「レムブラント」《寺院内の出現(二)》750 円である。価格の分布でいうと(表 2)になる。

こうしてみれば,「美術工芸品展」の価格帯は相対的には安価だった,もしくは松方コレク

（表 2）「美術工芸品展」と「松方氏蒐集欧州絵画展」の価格分布の比較

価格（参考：現在換算の価格）	「美術工芸品展」	「松方氏蒐集欧州絵画展」
10 万円以上　（約 7,770 万円以上）	0	2（絵画 2）
10,000 円以上 10 万円未満 （約 777 万円～7,770 万円）	0	12（絵画 12）
1,000 円以上 10,000 円未満 （約 77 万 7 千円～777 万円）	25（彫刻 25）	41 点（絵画 39，彫刻 2，家具等 2）
100 円以上 1,000 円未満 （約 7 万 7,700 円～77 万 7 千円）	101（水彩画 3，工芸品 98）	91（絵画 56，彫刻 1，版画 34，家具等 2）
100 円未満（約 7 万 7,700 円未満）	72（工芸品 72）	68（絵画 1，版画 67）

ションが相当に高額な作品を含んでいたことがわかる。中川（2018）[18] によれば 1924（大正 13）年第 3 回「仏蘭西現代美術展」（大阪会場）でも 300～1,000 円の価格の作品が一番多かったとしており，やはり 100 円～1,000 円程度が当時の西洋美術品の価格として相応・一般的とされた価格帯と言える。

宮崎（2007）や『日本洋画商史』の整理によると，昭和初期は 1918（大正 7）～1923（大正 12）年（広くとって 1916〔大正 5〕～1925〔大正 14〕年）頃の優れた西洋絵画を（輸入）蒐集する「泰西名画の大波」が沈静化する時期であった。これはニーズの減退というより，1923 年の関東大震災，1924 年 7 月末の「贅沢品等の輸入税」（奢侈税）公布，欧米での 19 世紀後半（印象派・ポスト印象派等）の絵画価格高騰などにより高額の「泰西名画」が入手しにくくなっただけで，一方では多数の日本人画家やパトロンが渡欧し，同時代美術の日本への紹介・移入が盛んにおこなわれる [19] など，形をかえ西洋美術熱は続いていた。とはいえ，欧州からの美術作品輸入には困難が多く，山中商会が得意とした中国文物の質にはとても及ばない。「美術工芸品展」の示す内容・質・量は，当時の日本人が入手し得た作品の内容・質・量・価格（の限界）を表しているといえるのではないだろうか。

4.「美術工芸品展覧会 ── 欧米最新考案 ──」の目的と意義

このように，「美術工芸品展」はタイトル通り「工芸品」が中心の展示である。しかも，室内を装飾する小型作品やしゃれた喫煙具・文房具の類が多数紹介されている。では，この展覧会の目的とは何であったのか。山中定次郎は序文で次のように述べる。

> 「我が工芸界に貢献するの意を以て，現今欧米の工芸界及市場に好評嘖々たる巴里，伯林，倫敦，紐育，その他の，制作せらるゝ考案の嶄新，応用の奇抜，技巧の巧妙なる溌溂たる工芸品を蒐集し，之と同時に我が商会より欧米へ多年輸出せる工芸品中，最新の

意匠製作に係るもの，並に米国に於て我社の考案によつて制作せる加工品を一堂の下に展観し斯界研究家の観賞に供し，其進歩改善を図る資料とせられんことを切望してやまざるなり。」

「欧米最新考案」の副題や序文と無署名記事「欧米最新の工藝美術 ── 主として佛蘭西について ──」が示すように，この展覧会の目的は，欧米の工芸品の実物を一堂に集めその最新の意匠を日本の工芸家の参考資料として提示することにあった（もしくはそのような大義名分であった）。こうした活動はこれが初めてではなく，例えば同社の「西洋美術」の最初の展示は『山中定次郎翁伝』（以下『定次郎伝』）での記述によると，明治期に「近東亞細亞，蘭領印度，希臘，コンスタンチノーブルその他から集められた」工芸諸作品を展示したことである[20]。同書の記述からこの展示は1900（明治33）年と推測されるが，同年の輸出向け洋式家具制作工場新設に絡んだもののようだ。その後，1931（昭和6）1月～5月の欧米旅行中に定次郎が収集した古美術品を「大阪北濱二丁目山中吉郎兵衛さんの陳列所に展示，一般に公開」したこともあったらしい。いずれも『定次郎伝』にしか記述がなくカタログなどが未発見のため詳細は不明であるが，こうした収集品の参考展示はこれ以外にもあったのかもしれない。

なぜこのような参考展示を幾度も実施したかの背景を知る手掛かりは，「美術工芸品展」と同年に発表された定次郎のドイツ・イギリス・アメリカの工芸の工房・工芸家の様子や作品についての所感をまとめた記事にもうかがえる（残念ながらフランスについての言及はない）[21]。そこでアメリカの工芸家等は「実に研究的で此点は迚も我国の工芸家などの遠く及ぶ処でない」「雑貨物でさへ極めて美術的に且つ堅牢に而して価額を安く作る事に努め，絶えず需用者側の気持ちになつて如何にしたら便利で持ちよいかといふような事を工風（原文ママ）して居る。」一方で，我が国でつくられるものは「其儘役に立つものは少ないので，どうしても英米其他の国々へ入れやうとするには，これに相当の加工をしなければならないといふ状態で甚だ遺憾千万である。」とする。定次郎が自身の体験や見聞から，日本の欧米輸出向け工芸品への危機感や改良の必要性を抱いていたことがわかる。

定次郎個人のこうした考えには，わが国の明治期後半の輸出向け工芸を取り巻く状況や，そこから始まる工芸デザインの改良も大きく関わっている。日本の美術工芸品，とくに海外輸出は1900年のパリ万博での深刻な不評により抜本的な改革が不可避となり，官民・多方面で工芸の改良が進められていた。海外では1925年パリ万博からアール・デコが発信され，国内においては1927（昭和2）年帝国美術院展覧会第四部が，翌年仙台には商工省工芸指導所が開設され，作家たちからも无型や国画創作協会工芸部のような新しい工芸の確立を目指す

団体が次々と誕生するなど，工芸をめぐる新たな動きが活発化していた。とくに大正期から昭和初期において工芸のデザインとその課題は，作品の表面の装飾や意匠だけでなく，例えば 1919（大正 8）年「生活改善運動」や『工藝時代』（1927 年創刊）の刊行といった事象に象徴されるように日常生活の美化や，生活空間や住宅という新しい生活様式にまで広がる問題へと発展しており，工芸家自身も様々な活動や議論を重ねつつその目指すところを模索していた[22]。

「美術工芸品展」で紹介・販売した室内装飾品や雑貨類は，このような動きのなかで当時勃興してきた中間層の住宅やそのライフスタイルを充実させるアイテムとして享受・消費されることを目的としていただろう。先行研究で神野由紀が指摘するように[23]，当時そのような「良い「趣味」」の商品群を提供し大衆へ趣味の流行を先導し支えたのは百貨店であった。山中商会は自社店舗のほか，前述のように阪急百貨店に 1932（昭和 7）年の美術部開設当初から常設の売り場を出店し，展覧会会場に百貨店を使用するなど[24]，こと大阪では神野のいう「趣味」の先導者たる百貨店美術部のような存在としてふるまっていたと言える。

また，停滞する日本工芸の現状を打破するための一つの材料として本展を開催する，というのが山中商会の主張であるわけだが，そこに山中商会，もしくは山中定次郎の工芸デザインへの考えや特徴があらわれていると考える。カタログにある「欧米最新の工藝美術」は，署名がないためおそらく定次郎の意向を受けた，もしくは本展覧を実際に企画運営した社員が書いたと思われる。ここで海外の工芸デザインの動向は次のように説明される。1925 年のパリ万博で日本の出品は評価されなかったのにも関わらず「仏蘭西の官民は此博覧会に於て，過去二十五年の間研究を續けて来た，新工藝構想とは奈何なるものであつたかといふと，夫れは日本の模倣であった―直譯的ではないが―而して審査の結果は，意外にも日本の模倣だと思はれる程高賞に擬せられ，最も獨創的で且つ合理的で，これこそ新工藝の模範だと賞讃せられた。」「而して此博覧会に於て発表された佛國の新工藝構想は直に欧州各地に傳播し，今日に於ては欧米各国共一様に日本的要素を採用し，以て新時代の工藝として發表するに至つた」。個別の作品への言及でも，例えば「セーブル國立製陶所の作品が，著しく日本的になり」，鉄工芸も「エドガア・ブラン作の衝立の如き，其形状からして已に大に日本的である」，ほかにレノセーの作品は「日本から漆工家を聘して蒔繪を研究した，ヂヤン・ジユナン氏の獨創に係るもの」とあるし，マヨドンの紹介文には「氏の最近研究の東洋風の壺二個を示して」とある。もちろん，日本的要素があるとはいいつつ，欧米の作品は「新時代の特長」を備え，「新時代工藝」として苦心し工夫と洗練がなされているとして，現状の日本の工芸やデザインをそのまま肯定するような表現にはなっていないものの，西洋最新の考案・現在海外で評価されているデザインの根底には「日本の模倣」「日本的要素」があると主張するので

ある。

一方で本展には山中商会の米国加工品が出品されている。久米桂一郎の序文はこれに着目し「日本や支那の平凡なる細工物は原料となつて米國の藝術的工人の手により，加工されて貴重品が生産される」とし，山中商会が高価な工費を払ってアメリカで加工させるのは日本の工芸が全く「田舎細工の領域を脱出していない」からだとして，米国の進歩を指摘し日本の工芸の停滞を憂う（これは先述の定次郎の欧米の工芸家への所感と同じだ）。そして，あえて「商業上の秘密を犠牲にし」「新技巧の公表を断行」した社長・定次郎の決断をたたえている。実際，山中商会がフランスやドイツ等の西洋美術工芸品と合わせて，自社製造の輸出向工芸品を展示したのはなぜか。

そもそも山中商会は明治に欧米に支店を出し始めた当初から，いわゆる古美術品・骨董品以外にも完全輸出向けの洋式家具を大阪の自社工場（先述）で生産・販売しており，万博にも出展した。門田（2004・2017）によると，それら家具のデザインや室内装飾スタイルは，はじめは形状は西洋式でも材質や技法・装飾は日本由来といった和洋折衷であったものが，1900 年代には「日本美術史」の叙述やナショナリズムの勃興などを背景に，「日本美術史」を具現化・概観するかのような空間の創出へと展開していったという。残念ながらこの工場は 1909（明治 42）年に焼失し復活しなかったが，この輸出家具事業の後継・発展形がアメリカでの工芸品加工・販売事業といえるだろう。小熊（2006）[25] は当時山中商会が欧米で販売した「美術加工品」は日本の陶磁器や中国の絨毯をアメリカで加工するなど国際的な分業により製造されていたことを史料から明らかにした。さらにそのデザインが中国・朝鮮半島・日本の古美術の洋式的な要素が多分に含まれていたと指摘している。このように，日本や中国等の古美術品を取り扱うディーラー・山中商会が自社で新製造する家具・工芸品は意識的に日本的・東アジア的要素を用いたが，それだけでは欧米市場には不足で，欧米現地に受け入れられる形で加工することもまた重要なファクターであった。こうした輸出向けの家具や工芸品製造の経験が，欧米デザインの新潮流に「日本的要素」があるという主張の背景にある。そして実際に自社の「日本的」もしくは東アジア的デザインが欧米の顧客に受け入れられているという自負があったからこそ，山中商会もしくは定次郎はこれから進むべきデザインとして「日本的要素」をよく示す欧米の美術工芸品や自社の製品を本展で提示したのである。

むすびに

以上みてきたように「美術工芸品」展は，当時まだ入手が困難であった欧米の美術工芸品を展示し，販売＝購入できる貴重な機会であった。また，その展示品は日本の工芸の見本と

されたが，そこには最新の西洋工芸にも「日本的要素」を見出す山中商会ならではの主張があった。

なお，山中定次郎は 1931（昭和 6）年に欧米美術工芸界視察として滞欧し，同年 5 月 6 日にはフランス政府よりフランス美術並びに工芸品を日本およびその他の国々に紹介した功績で「シュバリエ・ドラゴン・ダンナン勲章」（Chevalier Dragon d'Annam か）を授与された[26]。同様に 1933（昭和 8）年 6 月 23 日にはドイツ・ヒンデンブルグ大統領よりドイツ美術並びに工芸品を日本および世界各地に紹介した功績により，「ローテン・クリユーツ勲章」を授与されており[27]，本展のあとも欧州各地の工芸品を積極的に取り扱ったことがわかるが，展覧会活動としてはそうした動きを追うことはできない。「美術工芸品展」は山中商会による西洋工芸品移入の端緒の一つと思われるが，同社の欧米工芸品輸入の活動についてはまだ不明な点も多いため，今後の調査課題の一つである。

註

1 日本洋画商協同組合編『東京洋画商史』（日本洋画商協同組合，1994）。

2 宮崎克己『西洋絵画の到来』（日本経済新聞出版社，2007）。

3 山中商会の歴史全般については，主に山中定次郎翁伝編纂会編『山中定次郎伝』（1939），朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ　東洋の至宝を欧米に売った美術商』（新潮社，2011）等を参照。

4 山中商会が主催した国内外の東アジア（中国・朝鮮・日本）美術の展覧会については，主に次の先行研究を参照した。冨田昇「山中商会展観目録研究 ── 世界篇 ──」（『東北学院大学論集　人間・言語・情報』115 号，1996）。同「山中商会展観目録研究 ── 日本篇 ──」（『陶説』538 号～543 号，1998）。中国山中讓・金立言編『山中商会经手中国艺术品资料汇編』（上海书画出版社，2020）。

5 門田園子「山中商会「日光式展示室」について ── 明治期様式家具と室内装飾のスタイルに関する一考察」（『デザイン理論』44 号，2004）。同「海を渡った彫刻家具 ── 横浜を中心に」（『家具道具室内史』9，2017）。荘司つむぎ「「大和古乃美」明治時代に山中商会が欧米に輸出した高級家具」（『家具道具室内史』9，2017）。

6 モハッラミプール・ザヘラ「1920 年代日本の美術商とペルシア美術工芸品の展覧会」（小野亮介・海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏 ── ヒト・モノ・情報の交錯から見る』人間文化研究機構地域研究推進事業「現代中東地域研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点，2022）。

7 松方コレクションと山中商会・同社社員岡田友次との関係については，越智裕二郎「松方コレクションについて」（『松方コレクション展』神戸「松方コレクション展」実行委員会，1989）に詳しい。

8 小山弓弦葉「染織ディーラーとしての山中商会 ── アメリカにおける活動を中心に ──」（小山弓弦葉・長谷川聖子編『日本染織コレクションの形成とその美術史的価値観の確立に関する研究』（調査研究報告基盤研究（A）課題番号 15H01873 報告書），2022）。

9　柳宗悦「民芸品展覧会に際して」（『柳宗悦全集』11，筑摩書房，1981）収録。ほかに同「民藝館の生立」（『柳宗悦全集』16 巻，筑摩書房，1981）にも同様の記述がある。

10「民藝をバックアップ　柳宗悦と山中定次郎」（『目の眼』543 号，2021）。

11 山本真紗子「戦前の阪急百貨店美術部の活動 ── 民芸との関わりを中心に ──」（『同志社大学社会・芸術国際センター年報』2，2010）。

12 中川三千代「エルマン・デルスニスによる両大戦間における日本での展覧会活動」（『文化資源学』16，2018）ほか。

13 岡部昌幸・金内俊樹「山中商会『美術工芸品展覧会：欧米最新考案』図録（1928 年 10 月 6〜8 日）について」（『帝京史学』36，2021）。

14 エミール＝アントワーヌ・ブールデル（1861-1929）。フランスの彫刻家で日本人彫刻家にも大きな影響を与える。《弓をひくヘラクレス》は彼の代表作のひとつで日本国内にも複数所蔵されているが，本作はルクサンブルク美術館所蔵のものを「氏の手に依つて好箇の小品に縮作したもの」である。

15 企業物価指数（国内企業物価指数）による令和 4 年と昭和 3 年の比較は，859.4（令和 4 年）÷1.106（昭和 3 年）＝約 777 倍。日本銀行ウェブサイト〈https://www.boj.or.jp/about/education/oshiete/history/j12.htm〉より（2024 年 1 月参照）。

16 Jean Mayodon（1893-1967）セーブル出身の陶芸家。

17 前掲註 4 冨田（1996）および冨田（1998）を参照のこと。

18 前掲註 12 中川（2018）参照のこと。

19 このころのヨーロッパ・ロシア等の芸術運動の受容や日本の新興美術運動との交流等については五十殿利治『日本のアヴァンギャルド芸術　〈マヴォ〉とその時代』（青土社，2001）等に詳しい。

20「海外の工芸品初展示」前掲註 3『山中定次郎伝』p20。

21「欧米各国の工藝を見て」前掲註 3『定次郎伝』pp431〜432。

22 樋田豊郎「日本のアプライト・アート ── 大正期における工業と美術の再接近」・田境志保「工芸美術 ── 現代性への試み」いずれも長田謙一ほか編『近代日本デザイン史』（美学出版，2006），森仁史『日本〈工芸〉の近代　美術とデザインの母胎として』（吉川弘文館，2009，pp63-185）。

23 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』（勁草書房，1994）。同『百貨店で〈趣味〉を買う 大衆消費文化の近代』（吉川弘文館，2015）。

24 多くの展覧会は大阪美術倶楽部や東京・上野の日本美術協会（会館）で開催したが，昭和に入り大阪の松坂屋百貨店や阪急百貨店も会場として使用している。

25 小熊佐智子「山中商会の「芸術加工品」について」（『芸術学研究』9，2005）。

26 前掲註 3『定次郎伝』p32，p43（「昭和 3 年」と誤植ヵ），p72。

27 前掲註 3『定次郎伝』p36，p72。

＊ 本研究は JSPS 科研費（22KJ2591）の助成を受けた。本論文は第 65 回意匠学会大会での発表「近代日本の海外美術品の仲介者と場」にもとづく。当日質問・コメントをくださった皆様，ならびに資料調査等でご協力いただきました山中商会・山中譲様，水山昌陽様に心より感謝の意を表します。

The Activity of Yamanaka & Co.'s Importation of Western Arts and Crafts and its Significance:
Focusing on *Bijutsu Kōgeihin Tenrankai: Ōbei Saishin Kōan* published in 1928

YAMAMOTO, Masako

This study examines the significance of the exhibitions of Western arts and crafts organised by Yamanaka & Co., a recognized specialist dealer in East Asian art. The author examined *Bijutsu Kōgeihin Tenrankai: Ōbei Saishin Kōan*, an exhibition catalogue published in 1928. This catalogue, owned by Yamanaka & Co., shows what was exhibited and the prices of some of the exhibits. The exhibition focused on modern French sculpture and Western artefacts, both of which were small pieces for interior decoration. Yamanaka & Co. presented these works to the creators of Japanese arts and crafts as models to improve the design. They argued that European design imitated Japanese design, whilst developing Japanese elements to the present day and encouraging the improvement of Japanese craft design. President Sadajirō Yamanaka was deeply involved in the collection of the exhibits and in the promotion of the exhibition. After this exhibition, Yamanaka & Co. continued to actively import European crafts, targeting the emerging middle classes of the time.